日本列島と自然災害

写真は朝日新聞 10 月 16 日朝刊。15 日午後 3 時時点で国土交通省がまとめた台風 19 号による堤防決壊の場所。まさに見出し「堤防決壊 同時多発」である。

同紙 18 日朝刊「月刊安心新聞＋」で、神里達博・千葉大教授が標題について論じている。抜粋して紹介。

かつて丸山真男は、日本では「作為」の論理が定着せず、「自然」の論理に回収されることが多いと述べた。本当は対策ができたはずの災害、あるいは不適切な対応をした結果起きた災害も、「お天道様」につい帰責してしまう傾向が、私たちの心には残っているのではないか。「自然が相手では、仕方が無い」とのみ込んでしまうのだ。それは、激甚すぎる自然条件を生き抜く上での、ある種の精神的な適応の結果なのかもしれない。

しかし、改めて強調しておきたいのは、災害とは、自然と社会の相互作用で生じるものだという点だ。たとえば、地震は確かに恐ろしいが、極論を言えば、強い地盤を選び、テントを張って暮らしていれば、被害はほとんど生じないだろう。私たちがどのような暮らしぶりを選ぶかによって、被害の程度は大きく変わる。つまり広い意味で、あらゆる自然災害は「人災」なのである。逆に言えば、私たちには対策を立て、未来を変える自由があるということだ。

とりわけ治水に関しては、この列島の先輩たちは、長年、膨大な努力を重ねてきた。たとえば、利根川は、まさに自然と人間の相互作用の結果、現在の姿になったといえる。広く知られているように、元々この川は、現在の東京湾に注いでいた。今、銚子まで流れている利根川下流は、「常陸川」と呼ばれていた。かつての利根川は流路が安定せず、群馬や埼玉の平野でコースを変えながら、また秩父から来る荒川と何度も合流しつつ、まさに勝手気ままに流れる「坂東太郎」であったのだ。

1590 年、関八州に徳川家康が移封されて以降、氾濫を制御して水害を防止すると同時に、関東の水運の基盤として河川を整理する、巨大プロジェクトが始まる。徳川家の命により、これを受け持ったのは、測量や治水技術に秀でた伊奈一族であった。こうして、堤防の構築や新たな川の掘削などが営々と続けられた結果、利根川の流路は東に移って流れも安定し、現在の形となった。重機もトラックもない時代に、人手によって大河の道筋を変えた先人の苦労を思うと、頭が下がる。

悲惨な災害が起こるたびに、私たちは無力感に苛まれる。しかし、この列島に住む人々の多くは、そのような悲劇から立ち上がり、生き抜いてきた人たちの子孫である。希望を失うことなく、クリアな頭で対策を考え、実行していきたい。

（2019年10月27日）